

2023年4月

## 課題本 『ニホン語日記』

井上 ひさし/著

文藝春秋

1993年

### ◆◆◆4月の読書会から

先月の「私の一冊」の振り返りから始まった今月の読書会。他の人が薦めた本を実際に読んだ人もおり、そこから話を広げてくれて一人の読書では選ばない本と出会うことができる機会は本当にありがたいですね。

今月は吉川先生の不在、前期半年お休みの参加者もいて少し寂しいスタートとなりましたが、課題本は身近な日本語を取り扱った本で、各章が短く読み易かったこともあり参加者それぞれが気になった章もたくさん挙がりました。他の人とかぶることも少なく、どんどん意見やエピソードが出て、あっという間に終了時間になりました。

課題本のタイトルが「日本語」ではなく「ニホン語」である意味、日本語は変化したりゆらいだりするが変わらず守った方がよいこともある、などの意見も出ました。

(文責:森下)

### 『ニホン語日記』を読んで

#### ◆【YA】

印刷物の文章がジャンル毎に細かく分けてあり、どこから読んでも抵抗なく読んだ。面白いものあり、なる程あり、うなずくものありで楽しく読んだ。

読み終えて印象に残ったことがある。あちこちに貼ってあるビラ、チラシ、野球界の規約や問題、国・政府発行の刊行物等々、色々なジャンルに渡る印刷物の文章を、自分の目で実際に見て取材、収集している井上ひさしの姿が想像出来たことだ。

生活する上で大切なことの一つは言葉だと思う。書く、読む、話す、の手段はあるにせよ、意思の疎通を図る為の重要な道具となる。いつ頃日本語は生まれたのだろうかと検索すると、日本人の祖先は、自分たちの文字は作らず、すべての知識や文化・歴史を口承によって語り伝えているとも言われている。

今使っている日本語のもとになった形は二千年前の弥生時代だそうだ。そして日本語は遅くとも奈良時代には使われている。平安時代、鎌倉時代に多くの作者を輩出したのも納得できる。

これはもう言葉が確固としたものとして存在しており、書くことで、残って伝えられているのだろう。

言葉はその時代の社会的背景や状況を反映して変化していく。時間の経過と共に、廃れていく言葉もあり、新しく生まれる言葉もある。正に言葉は生きものだ。

この本は30年程前に出版されているので、現在とは表現の仕方や言葉そのものが変化し

ているかもしれない。

日本語は本当に複雑で難解な言葉だと思ってしまう。話す時は話しているが、いざ書くとなると、漢字(当て字あり)、ひらがな、カタカナ、句読点等々の使い方は正しいか、意味は通っているのかと迷うことがある。現在JISに登録されている漢字は 6,400 字弱あり、普段使うのは 2,000 字程度とある。

今の時代、書くという作業が非常に少なくなっており、言葉の変化も多く、聞きなれぬ言葉も出てくるに違いない。殊に今の若い人の使う言葉はスマホの影響大だと思うが、これも又時代の反映で悪いものではない。言葉はお互いの意思疎通の手段のひとつであり、大切な財産である。又、時の流れの波に乗って揺れて変化し移ろっていくものではあるが、言葉は変化しても言葉そのものは消えることなく連綿と存在する。改めて「日本語」そのものを見直す機会を持つことが出来た。

### ◆ 【 TK 】

お恥ずかしいのですが有名な作家なのに読んだこともありませんでした。そして調べてみると、日本語に関する学者みたいな本ばかりでした。しかも、あちこち観察に行ってみたり、電話して聞いてみたりでした。更に学者みたいに専門用語が沢山出て来てしかも言い回しの回転が速くついていくのに大変でした。

難しいことを分かりやすくそしてユーモアたっぷりに語っていくのです。さすがにひよっこりひょうたん島とか猫じゃらしの 11 人を創作されているだけに子供も楽しませていました。確かにこの番組は大人も楽しいとんちも風刺もたくさん出てきていました。

言葉は時代により変わっていくものですが、各分野においての言葉が書いてありました。知らず知らずのうちに使っている言葉はこうあるべきかどうあるべきか考えさせられました。作家は特に正しい文章を書かなくてはならないので大変だと思いました。

方言が地方によっていろいろあるように時代をうつされてしているのです。

そして広告、新聞は人に分かりやすく受けやすい単語を考えていました。

私としては、快いことばを家族や人のために使うことが周りを良くしていくことに励んでいきたいと思いました。

### ◆ 【 JM 】

ふだん何気なく使っている言葉について考えさせられた本でした。13年前に他界された著者が今生きておられたら現状を見てどう思われたでしょうか。言葉は時代とともに変化するとは言え、ついて行けません。

読書会では「配偶者の呼び方に迷う」というお話が出ました。私もそうです。年配の方には「主人」、親族には「〇〇(名)さん」、友人には「〇〇(姓)」、人権意識が高いであろう人には「連れ合い」と使い分けています。なぜ使い分けているのか…「こう呼びたい」という確固たる信念のない私にとっては自分をよく見せたいというエゴだと思います。じゃあどう呼べばいいのでしょうか。「言葉は人を表す」ことを肝に銘じて、少しでも美しい言葉を遣うよう努力していき

たいと思いました。そんなことを考えさせてくれた本でした。

## ◆【 T 】

普段何とも思わず使っている日本語の、面白さ・楽しさ・難しさ・不思議さ等に気づかされると共に、身の回りの様々な物の中から気にかかる点を見つけ出し考察している作家井上ひさしさんに興味がわいた。

『説明文の伝達度』の中に書かれているが、家電等の説明書は本当に分かりにくい。私自身も、本当は読んで理解してから使ったらいいのだろうが、読む前に読むことを諦めてしまっている。きっと様々な機能を使いこなすことなく過ごしているのではないかと思う。

『平仮名名前』での名前について、【他人の読めない漢字は名前に使うものではない】という意見や、『いわゆる「湘南問題」について』の中での、【地名いじりは愚かな行為である。……文化遺産の最たるものである地名をいじくり回すのは刹那的で傲岸不遜……せめて地名ぐらいはきちんと子孫に譲り渡そうではないか。】という考えには、全く同感である。読みにくい名前を子供につけたり、昔からの地名があるのに違う地名にしたり漢字を平仮名に変えたり、中にはカタカナの地名にしたりするのはおかしいと以前から思っていた。

作者は、日本語が変わることには柔軟な考えを持っている。しかし、変わってもいい部分と変わってはいけない部分があるということを考えて欲しいのだろう。

彼の言葉に、「むずかしいことをやさしく、やさしいことをふかく、ふかいことをゆかいに、ゆかいなことをまじめにかく」さらに、「まじめなことをだらしなく、だらしないことをまっすぐに、まっすぐなことをひかえめに、ひかえめなことをわくわくと、わくわくすることをさりげなく、さりげないことをはっきりとかく。」というのがある。この『ニホン語日記』がまさにそのように書かれた文だと思う。読んでいて時にはクスッと笑い、時には成程と感心するような文という意味かな？

毎日何気なく使っている日本語だが実に奥が深い言葉だ。日本語を上手に使いこなせるようになりたい。

## ◆【 望月悦子 】

内容の深みはもとより、井上さんらしい含みのあるタイトルだなど思いながら、日本語の起源はどうだったかなと興味を持ち調べてみました。それらによると「中国から日本に漢字が伝わったのは、4世紀・5世紀といわれている。弥生・古墳時代である。当時まだ日本には固有の文字はなく、すべて口伝えであった。日本語の音を表記するために万葉仮名が生まれた。漢字の表す意味とは無関係に言葉の音にあてはめた。1字1音節(やま:山を也麻、はる:春を波流)万葉仮名は5世紀には使われていたが7世紀(古墳・飛鳥時代)ごろには成立していた。ひらかなは万葉仮名が由来となり漢字を簡素化して作られた。カタカナは漢字の一部を取って作られた(阿→ア、伊→イ、宇→ウ、江→エ、於→オ)

漢字は公文書を書くため学問をする一部の者しか読み書きできなかった。ひらかな・カタカナはより多くの人に読み書きできた。1900年(明治33年)小学校令施行規則の第1号表に

48種の字体のひら仮名が示され一般に普及」などなど。母国語は歴代の日本人によって試行錯誤、四苦八苦しながら一番ふさわしい、一番身近で使いやすい言葉にするために努力され培われてきたことが理解できます。この本は、そんな日本語を大切にするために、膨大な資料をベースに揶揄を交えながら日記風にして、自分の言いたいこと・考えていることをまとめたのではないかと思います。

さらにこの日記を面白くしているのは、挿絵の安野光雅さんの50音カルタ。著者から好きに自由にやってほしいと依頼されたのではないかと想像したくなりました。文面のふさわしい箇所にカルタが画人独特の創作文面で、著者の皮肉揶揄などを含んだ主張を一層増幅させます。

乳児は、最初は泣くことで不快感を表現します。快感は笑顔で。それから徐々に言葉を獲得して自分の気持ちを相手に伝えていくようになり、言葉は自分の気持ちや考えを伝えるための道具となっていきます。言葉の面白さは、「ゆれる言葉P31」にあるように、切羽詰まると人は「言い損なう」ことがあり本音を出してしまい取り返しがつかなくなることもあります。それも言葉。更に「発音しやすい方が次第に本流を占めるようになる(P56)」という説もあり、言葉は揺れることで生きている。それも言葉の特徴かもしれません。また、昨今は外来語の氾濫で辞書を片手に持たないと理解できないことがあります。「外来語の問題(P124)」においては、「外来語には名詞以外の品詞はない。すべて名詞化されて使われている。日本語の文法体系は無傷なのである。語彙は動いているが、文法はまだ犯されていない。信念をもって日本語を運用すればよい」と警告しています。著者の創作モットー「難しいことを易しく、易しいことを深く、深いことを面白く」のように、この本から、日本人として「にほん語」を守るために向き合う姿勢、考える力、継続するための努力などを考えさせられました。

## ◆【 MM 】

作者の視点が思いもよらないところに焦点があたっているところが多く「そこ?!」と驚きながら読んだり、「どういうこと??」と一度読んだだけでは理解が難しく何回か読み直した章もあった。

今月の課題本『ニホン語日記』は30年前に出版された本である。「ゆれる言葉」の章では変わりゆく言葉がいくつか挙げられているが、30年経った今ではそこからまた変わっている言葉がある。日本語は生きている、生きているゆえに変わってゆくのか…と強く思った。それと同時に、意味や発音が変わっていく(変わっていくことが受け入れられていく)ことはあっても「本当はこういう意味なんだよ」「こういう発音なんだよ」と教えてくれる人がいてもいい。そういう人がいてほしいとも思った。

今月の本が比較的読み易かったのは取り上げている題材が身近なものが多かったからではないだろうか。携帯電話が普及した今は見ることがなくなった駅の伝言板、これは懐かしかった! 私が大人になるまで住んでいた田舎の駅には伝言板があった。たくさん書き込まれてはいなかったけれど、伝言板には文句や愚痴(これらは伝言というより落書き)、詩のようなものも伝言と一緒に書き込まれていた。その頃私はドキドキしながら盗み見るように読んだことを思い出す。どうしてドキドキしたのだろうか…。伝言は書く人と書く人が宛てた人の二人の

関係にお邪魔する、覗き見る感じがあったのかしら。作者も書いていた暗号のような伝言、相手にだけわかる内容というのも読んでいて楽しかった。ごくたまに他人からの返信やお礼も書かれており、伝言板の中に物語があった。今はメッセージを個人で送ったりグループで共有したりするだけだ。SNSという誰でも参加できるツールもあるけれど炎上や誹謗中傷も目にしやすく、これを作者が見れば憂いだらうか、怒っただらうか。

毎日使う日本語、身近すぎて見過ごしてきた日本語について考えた今月の読書会でした。